

## 2021年度 個人研究実績・成果報告書

2022年 4月19日

所属	商経学部	職名	教授	氏名	松本理一郎
研究課題	比喩的意味の拡張				
研究キーワード	比喩、カテゴリー化	当年度計画に対する達成度	4.当初の計画どおり研究が進まなかった		
関連するSDGs項目	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	
<p>1. 研究成果の概要</p> <p>認知言語学では、カテゴリーについて、従来のアリストテレスを淵源とするらえ方とは異なるものが提唱されている。その特徴のかなり多くが、語の意味変化に、その例証が得られるのが、今回の研究で判明した。その一つに、カテゴリーの境界線のあいまいさがある。伝統的なカテゴリー観では、Aがカテゴリー<math>\alpha</math>に属するなら、英語でいえば、A is <math>\alpha</math>.が成立し、属さないなら、A is not <math>\alpha</math>.が成り立つ。</p> <p>同一性という概念に関して、諸言語で、それに関連する語の語源を遡ると、カテゴリーの曖昧さと同一性との関わりを闡明する事例が見つかる。日本語の同一性を表す漢語系の言葉に「同一」を始め、「均一」、「合一」、「一様」、「一致」などに見られるように、「一(いち)」が現れる。この和語が「ひとつ(一)」で、この語の形容詞形が、「ひとしい(等)」で、日本語でも、「一つであること」と「同じであること」が結びついている。</p> <p>英語の諺 Birds of a feather flock together. (同じ(一つ)穴の貉/類は友を呼ぶ)に見られるように、one に由来する a(n) には、the same の意味がある。英語が属する印欧語族の「一つの」を表す語根 *sem- を調べると、カテゴリーの境界線の曖昧さと結びつく事例が見つかる。</p> <p>例えば、英語の same はこの語根に由来するが、同じ語根で古ノルド語を経て英語に入った語として seem がある。この語はかつて「合致する」という意味を持っていたが、現代英語では A seems to be <math>\alpha</math>.のよぶに、カテゴリー<math>\alpha</math> への少しばやけた所属を表す。動詞 be が、「断定」を表すのに対して、seem to be は、それを少しばかすの用いられる。</p> <p>同一のカテゴリーに属するものは、「(種)類」としてとらえられる。動詞 seem と同様、カテゴリーの所属をばかす英語表現に A is a kind of <math>\alpha</math>. がある。OED によれば、My master is a kind of knave. が初出例である。「生まれつきの性質」、「部族の同じ特徴」から「種族」、「種類」の意味が生じたものである。一族は、ヴィトゲンシュタインの「家族的類似性」を部分的に共有する例である。古典的なカテゴリーでは対応できない。</p> <p>「種類」に関連して敷衍すると、日本語では「あるカテゴリーに仮に属すると考える」という意味を「見なす」、「見立てる」などという。これらに含まれている「見る」は、認知において最も重要な視覚を表す動詞である。対応するラテン語の動詞は、specere で、この名詞形が 英語に定着したのが、生物学の species (s 種) である。この場合、ラテン語で「外見」から「種類」の意味が生まれている。</p> <p>以上かいつまんで例示したように、今回の研究で、語の意味変化からも、認知言語学のカテゴリー論の妥当性が裏づけられるであろう。</p> <p>2. 著書・論文・学会発表等 (査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載)  【論文 (査読あり)】 今後発表予定  【著書・論文 (査読なし)】 なし 【学会発表等】 なし</p> <p>3. 主な経費 なし</p> <p>4. その他の特筆すべき事項 (表彰、研究資金の受入状況等) なし</p>					